

何のために記事を書くか。社会に役に立つから書く。私は、そう考えて新聞記者時代、記事を書いた。

そうではない、自分のために、自分の功名心のために書いたとしか思えない記事がある。朝日新聞の「逃避行中の日共幹部伊藤律、幻の会見記」や沖繩のサンゴ礁に自分が傷をつけ、「誰がこのような環境破壊をしたのか」といったデッチ上げがこれに相当する。

魚屋で買ったイセエビを「網にかかった」ように見せかけて放送した日本テレビの報道番組があった。これも功名心からのねつ造である。視聴率の不正工作もそうだ。

としか思えない記事がある。たとえば10月27日に共同通信の配信で福井新聞や中日新聞が載せた、関西電力大飯原子力発電所での事故を想定した被害試算記事である。

大飯3、4号のいずれかで大規模に放射線漏れが起きた場合、長期的な被害額は460兆円に上り、急性障害やがんによる死者も40万人を超えるおそ

## 報道の大切さ

れがあるとの試算を、京都産業大学の林勝俊専任講師がまとめた、という内容の記事だ。

大学の先生がどんな研究を発表されるか

フソがばれなければ本人は得点を稼いだかもしれない。原子力の報道でも、点数稼ぎに書いた

北海道新聞道南版(平成10年5月9



なかむら・まさお  
=電力中央研究所研究顧問。科学ジャーナリストでもある。読売新聞論説委員を経て、96年から同研究所。著書は「気象資源」(講談社)、「10歳からの科学」(読売新聞社)など多数。山口県出身。

### 中村 政雄

原子力は否定的報道が多い。マイナス面ばかりが強調されて報道されるためか、一般の方々が持つ原子力発電のイメージは暗い。暗いイメージのまままで放置しておいていいか。

日付)が「大間原発で事故が起きたれば市民4800人急死、5年後生存せ

きは大きく報道されたが、スイスの国民投票で脱原発が否定された、スウェーデンでは国民の8割が反対するので法律で廃止を決めた。2基目の原発が停止できない、米国では原子力発電のコストが最も安く、国民や経済界の支持が向上し、30年間新設のなかった原子力発電復活の動きが出てきたことなどはほとんど記事にならない。

「5年後生存ゼロ」は科学的な判断なのだろうか。原子力は危険性をはらんだ技術である。「安全に気を付けよう」という警告の記事が出ることは悪くない。だが悪いニュースばかりがオーバーに報道される。

日本にいる記者には取材の機会が少なからず記事になり難いのだろうが、どうすればプラス面のニュースが報道されるようになるか、電力業界は努力する必要がある。いいニュースも悪いニュースも積極的に集めて、報道関係者に知らせてもらいたい。プラス面を

平成9年に旧動燃東海事業所の再処理工施設で起きた火災爆発事故で「37人が受けた放射線による健康影響を分析し「健康影響の心配はない」という見解を発表した。被ばくは大きな記事だったが、「心配ない」はほとんど記事にならない。危険だ」というのは大きな記事になる。これは原子力に限らないが、原子力ではそういう機会が多い。書けば大きい扱いになり易い。比較的楽に派手な記事が書ける。自分が書かなくても、他社が書けば「なぜ書かないか」と叱られる。そういう事情もあって、